

印欧語の「車」

風間, 喜代三

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

104

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

1998-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004623>

印 欧 語 の 「 車 」

風 間 喜代三

ものを運ぶために工夫された車の歴史は、ヨーロッパでも先史時代にまでさかのぼることができる。橇のようなものから車に移行するためには、なによりも車輪が必要である。現在残っている遺品によると、橇のような固くて厚い板を3枚つなぎ合わせたものが多く、紀元前3千年代の北欧の2輪車で322キロ、4輪のものでは700キロくらいの重みがあったのではないかと推定されている⁽¹⁾。

これでは実用性に乏しいので、これを実際に利用できる限度まで軽くしなければならぬ。しかしそれに成功したとしても、車が一般化するにはかなりの時間が必要であった。逆にいえば、車を所有することは、一つの社会的身分の高さを示すものであったらしい。中部および東部ヨーロッパの各地から出土している埋葬品のなかに、一対の牛の像とか、牛が引く車を描いた土器や、車の形をした杯などが数多く指摘されている。とりわけ M. Gimbutas によって印欧語族の故郷と推定された黒海北岸のクルガン文化の墓からも、100 ほどの車の埋葬品が認められることは注目に値する⁽²⁾。これが単なる死者の富を誇示するためのものなのか、あるいはこの車が死者を最後の休息の地に運ぶようにという、宗教的な祈りをこめたものなのかはよくわからないけれども、こうした考古学上の車の跡からみて、紀元前3千年代には車の利用がヨーロッパにも広まりつつあったと考えてよいだろう。そしてこれがやがて我々が歴史時代の文獻にみるような、馬がひく疾走する車へと進展していくことになる。

古い印欧語族の残した文献によると、車にも2種類がある。一つは、主として牛などにひかせて運搬に用いられた車であり、もう一つは人を乗せて競技や戦闘に使用する馬のひく車である。例えば、Skr. *ánas-* と *rátha-*、Gr. *ἄμαξα* (Ion. *ἄμαξα*) と *ἄρμα* (一般に pl. 使用)、Lat. *plaustrum* と *currus* (m. gen.

currūs)である。そこでこの区別を考慮しながら、その用例について車の各部の用語についても検討していこう。

古代インドのもっとも古い文献である宗教的讃歌集リグ・ヴェーダ (RV) をみると、ánas- (n) と rátha- (m) が同じ詩節にあらわれる例がある。バラタ族の祭官であったヴィシュヴァーミトラとインダス河の2つの支流との対話という形式をとったⅢ 33 歌 (辻訳 岩波文庫 286) は、この詩人の祈りによって王の軍隊が安全に河を渡ることができたという歴史的背景をもっているが、その10 歌はつぎのように歌われている (原文は註の後に一括した)。これは両河の言葉である。「歌人よ、我らはお前の言葉をきこう。お前は遠くから荷車と戦車を伴ってánasā ráthena きた。乳のはった若い女子が (その子にする) ように、私はお前に身を屈めよう。乙女が若人に (する) ように、私はお前に身を委せよう」(RV Ⅲ 33 10, 原文 1)。もう一例として、RV Ⅷ 91 7 をあげておこう。これはアパーラーとよばれる陰部の無毛症を患う少女の歌で、彼女はみにくい皮膚のために結婚できなかったが、インドラ神の愛情に応じる代わりに病が快癒して、きれいな皮膚をえた (辻訳 368)。「戦車の車軸の穴で、荷車の車軸の穴で、くびきの穴で、シャタ・クラトゥ (インドラ) よ、お前はアパーラーを、インドラよ、三度清めて、太陽の皮膚をもつ者にした。(RV Ⅷ 91 7, 原文 2)。

この2つの車の区別は必ずしも明確ではないが、ánas-「荷車」は主に牛にひかれる⁽³⁾。だから牛は anaḍ-vāh-(m)「荷車をひく」といわれている⁽⁴⁾。太陽神の娘スーリアーと月神ソーマとの結婚という神話的な婚姻を歌った長篇 X 85 歌 (辻訳 239) でも、花嫁がソーマの家に行くときの ánas と、それをひく anaḍvāhav (du.) が10 歌にあげられ、ついで11 歌にははっきりと「2匹の牛」と歌われている。「讃歌と旋律によってつながれたお前の豊かな2匹の牛はいく。耳はお前の両車輪であった。道は天上に伸び進む」(RV X 85 11, 原文 3)⁽⁵⁾。

つぎにあげる詩は、先にふれたヴィシュヴァーミトラが、太陽神のつかわした巧みな言葉の技を学んで、いちどは敗れた歌のコンテストに勝利を収め、車を駆って帰還する際に、その車の無事を祈る気持ちを表現している。詩人の真意としては、自らが駆使する言葉が、恙なく走る車に象徴されているのかもしれない。「2匹の牛は確固たれ。車軸は堅牢、輻 (ながえ) はたち切れるな、輓 (くびき) はばらばらになるな。インドラが2つのくびきの留め金⁽⁶⁾を破壊

から守れ。その車輪の枠の無傷なるもの、我らが傍らに立て (17)。我らが身体に力をあたえよ。インドラよ、我らが車をひくものに anaḍútsu 力を。生きんがために子々孫々に力を。お前は力をあたえるものであるから (18)。(車軸へいう) カディラの木の芯をまとえ。スパンダナとシンシャパーの木に生気をあたえよ。堅牢なる車軸よ、堅牢なるもの、堅牢であれ。我らが道より我らをはずすな (19)。この木 (車) が我らをするな、また損うな。家まで無事でありますように、休息まで、解放まで (20) (RV III 53 17-20, 原文 4)。この歌を読むと、まず詩人は車の故障を恐れている、無事に車が家までたどりつくことを強く願っていることがわかる⁷⁾。それから ákṣa-「車軸」、iṣá「轆 (ながえ)、梶棒」、yugá-「軛 (くびき)」、nemí-「車輪の枠 (リム)」といった車の各部を示す語彙をもっていたことも注目されよう⁸⁾。

rátha- は ánas- と違って、主として戦いや競技のための車で、馬が使用された。これをヴェーダの詩人はつぎのように歌っている。「インドラよ、我らが戦車を rátham 援けたまえ、容易に負けることなく、競技には先陣を進み、あらゆる戦いに勝利を競って走る (車) を (7)。インドラよ、我らがもてきたれ、我らが戦車を至福とともに援けたまえ。我らは今日すぐれた名声をえたい、この上なく力強きものよ、我らは今日賞讃の歌を考えよう (8)」 (RV V 35 7-8, 原文 5)。rátha- は戦いはもとより競技によっても、vája-「賞」と śrávas-「名声」をもたらすものであり、その車そのものが śravasyú-「名声を望んでいる」 (RV V 56 8) と形容されている。またしばしば sukhá-「軽快な、快走する」という形容詞を伴って表現される。滔々と流れるシンドゥ (インダス) 河 síndhu- は sváśvā「よい馬に富み」suráthā, 「よい戦車に富み」vājínivati「勝利の賞に富む」と讃えられた後、つぎのように歌われている (辻訳 70)。「シンドゥは、軽快で、馬を備えた戦車を sukhám rátham aśvínam つけている。それによって (他の河との) この競争に賞をかちとらんことを。欺かれることなく、自ら名声を博し、賜物豊かなこの (車) の大なる威力は讃えられる」 (RV X 75 9, 原文 6)。曙の女神ウシャスの乗る車も、「美しく飾られた軽快な」supéśasam sukhám (rátham) ものであった (RV I 49 2)。

因みに、この sukhá- という形容詞は、古典では「快い、幸せな」の意味で、また中性の名詞として「幸福」をあらわし、その逆の意味の duḥkha-「不幸、苦しみ」がつけられ、これと対立して多用されているが、合成形として su-

「よい」はとりだせても、-kha- は意味をなさない。しかしこの kha- は先にあげた RV Ⅷ 91 7 (原文 2) にみられるように、本来は貫通した「穴」、車では車軸の中心をなすへその部分の「穴」であり、綱を通す軛の両側の「穴」をあらわす用語であった。またこの khá- は、つぎの歌の比喩からもわかるように、車輪の「輻、スポーク」をさしこむ「穴」でもあった。「ヴリトラ殺し (インドラ) は彼らを一撃で押しこんだ。車輪の輻をその穴に (押しこむ) ように。(インドラは) 成長してダスヌ (原住民, 魔) 殺しとなった」(RV Ⅷ 77 3, 原文 7)」⁹⁾

ánas-, rátha- のほかに古代インドには vipathá- (m) (vi-patha- 「はずれた道」という合成形、悪い道をいくための重い「車」や、śákata- (m)/śakaṭī (f) とよばれる孤立した「車」があるが、これらはインド語派特有の形だから、ここではとり上げずにおきたい¹⁰⁾。それよりも車の部分として最も重要な cakrá- (n) 「車輪」を無視することはできない。どのような形であれ、車輪が工夫されて、はじめて人間は車をもつことができたのだし、後述するようにこの cakrá- の対応 (Gr κύκλος, 英語 cycle, bicycle など) は、印欧語族が非常に早く車をもっていたことを示唆するものだからである。cakrá- は木製であったが、むき出しではなくて pavī- とよばれる輪金がかかっていた¹¹⁾。救済と医療の双神アシュヴィンは、翼ある馬にひかれた軽快な車をもっているが、その車は次のように歌われている。「天地両界をとじこめるお前たち (双神) の黄金の戦車は rátho 牡牛のように力強い馬を伴って来たれ。グリタ (バター) の溶液) を求め、輪金によって pavībhī 輝き、滋養をもたらすもの、王 (のように) 勝利の賞に富む (その車は)」(RV Ⅶ 69 1, 原文 8)。この rátha- はふつう 2 輪であった。それは車軸によってしっかりと固定されている。神話的背景のなかで、それはつぎのように歌われている。「インドラに私は讃歌を奉ろう、海洋の底から休みなく流れる水 (のように)。その (神) は力をもって天と地を別々に支えてきた、車軸によって両輪を cakríyā (du., cakri f. = cakra-) (支える) ように」(RV X 89 4, 原文 9)。哲学的な散文の代表として知られるチャンドーギヤ・ウパニシャッド (Ch. Up.) にも「2 つの足で歩く人、あるいは 2 つの車輪で進む車がしっかりと立つように、その人の祭式もしっかりと立つ」と述べられている (Ch. Up. 4 16 5, 原文 10)。この 2 輪車をひく馬は、これも一般に 2 頭であったが、ときには王が、また旅路を急ぐ人などが 3 頭、あるいはそれ以上の補助の馬を使ったらしい¹²⁾。パトロンである王を亡

くした祭官が、かつての栄華を車に託して嘆く言葉に「3 頭立て」がみられる(辻訳 338)。「その3頭の栗毛が車で rathe 私をまっすぐに運ぶ。(その王を)私は千頭の雄牛を布施とする(祭式)において讃えよう」(RV X 33 5, 原文 11)。

この車には2人が乗りこむ。これは古代ギリシアでも同様で、一人は主として弓をもつ戦士であり、もう一人は御者である。前者はリグ・ヴェーダでは, rathe-ṣṭhā- または -ṣṭhā-, つまり「rátha- に立つ(人)」という合成形が使われているが、これは専らインドラ神の英雄的な行為への讃辞の一つである。しかし後のアタルヴァ・ヴェーダ(AV)になると, savya-ṣṭhā- (ブラーフマナ散文では -ṣṭhr-, -ṣṭha-, -stha- という形もある)「左に立つ(人)」, つまり sārathí-「御者」(「車とともにある(人)」の「左に立つ(戦士)」という語が認められる。この歌集の敵をうつ祈りのなかに、次のような車に因んだ一節がある。「年は戦車 rátha-, 一年はその車の車体, ヴィラージュ(遍照者)は轡, アグニ(火神)は車の前部, インドラは左に立つ戦士, 月はその御者である」(AV VIII 8 23, 原文 12)。またこの讃歌集には、古典期に「御者」として使われる sūtá- も登場する。その III 5 歌は、パルナという木でつくったお守りへの言葉で、王権を強める祈願である。従ってここには王の側近の人々が言及されている。「巧みな車作りたち, 賢い鍛冶屋たち, すべての側近の人々を, パルナよ, お前は私のために下べにせよ(6)。(自らも)王をつくる王たち, 御者たち sūtá, そして町長たち, すべての側近の人々を, パルナよ, お前は私のために下べにせよ(7)」(AV III 5 6-7, 原文 13)¹¹⁹⁾。なおこのほかに「御者」として, Gr. *ῥινοχος* (*ῥινα*「手綱」-*ἔχω*「もつ」)に匹敵する raśmi-dhāra- のような形も古典期にはみられるが、これは人工的な合成形である。

我々はここで、印欧語族のなかでもインドと並んで車に関する資料に恵まれたギリシアについて検討してみたいと思う。ホメロスの詩にもみられるように、古代ギリシアにでも早くから車の利用は盛んであったが、その歴史はさらに古くミュケーナイ文書の時代にまでさかのぼることができる。というのは、クレータのクノッソス宮殿の遺跡の敷室から、かなりまとまった車に関すると思われるものの貯蔵目録が多数発見されているからである。それは Sc-Sg のシリーズに属するもので、線文字 B の解読の進展に伴って、Lejeune, Chantraine, Heubeck など多くの研究者の注目を集め、最近では Plath の研究に我々はそ

の成果をまとめてみることができる¹⁴⁶。これは王が戦いに備えて、そのための車や甲冑の数を確認しておくために、書記に作らせた目録であり、車輪つきの車（文字 Nr. 240）、車輪なしの車（Nr. 241）、車の台（Nr. 242）、さらには馬（Nr. 105）、甲冑（Nr. 162）、の類は、それぞれの象形文字で示されているので、その指示するところは疑う余地はない。この車は、先にあげたインドの文献にみられる、牛をはじめとする駄獣のひく荷車ではなくて、主に戦いのために馬がひく戦車だから、車の利用としては比較的進んだ段階にきている。後述するように、小アジアではヒッタイト語族をはじめとして馬の調教、車の技術はかなり発達していたから、ギリシアに人も早くからそれを学んだものと考えられる。ここでは Documents Nr. 268 (=Sd 0413) を実例としてあげておこう。このテキストには、一行目の末尾に車輪なしの車の文字が附せられている。「(一台の) 戦車、パイストス製（車輪をつけて）組み立てられる、木づくりの馬具（馬の首につけて轅につなぐ装置）つき、真紅の色の（車）、手綱つき、革の目の覆いつき、角でつくった馬銜（はみ）つき」（原文 14）。

ホメロスを見ると、ミュケーナイ時代の粘土の小さいモデルが示すように、騾馬 *ἡμίονος* (*ἡμι-*「半分」-*όνος*「驢馬」) のひく4輪の荷車から、馬のひく2人乗りの戦車まで、車の使用はしばしば語られている。一例として、オデュッセイア (Od.) 6 巻で、ナウシカーが父に頼んで車をだしてもらって、洗濯ものを河へもっていく場面を引用しよう。父親が娘に「いきなさい。召使いたちが丈も高くてよい車輪をつけた、荷台もついた荷車を *ἀπήνην* 用意しておくだろう」。こういって彼が召使いたちに命じると、彼らはそれに従った。「そこで彼らは門の外でよい車輪をつけた騾馬のひく荷車を *ἄμαξαν* 用意して、騾馬をひいてきて荷車に *ἀπήνη* つないだ」(Od. 6 69-73, 原文 15)。ここでは「荷車」について、*ἀπήνη* と *ἄμαξα* (*ἄμαξα*) がほとんど同意に使われている。もう一例を、イリアスの終わり 24 巻からあげておこう。これは、息子のヘクトールの死体を敵将アキレウスの下にひきとりにいくために、父親であるトロイアの王プリアモスが賄いの品を荷車に積みこませる場面であるが、ここには車の各部がかなり細かく描写されている。「こう彼（プリアモス）がいうと、父親の大きな声を恐れて彼ら（息子たち）は、よい車輪をつけた騾馬のひく美しくて新造の荷車を *ἄμαξαν* もちだしてきて、その上に荷台を *πεύρινθα* 結びつけた。そして騾馬用の軛を *ζύγρον* 懸釘からはずした、(その軛は) つげの木でできた、真んやかに突起がある、手綱を通す輪を *οἰήκεσσιν* しっかりととりつけ

たもの。軛とともに、前腕の9倍ほどの長さの軛の帯を *ζυγόδεσμον* とりだした。そしてよく磨いた轅の棒に *ρύμῳ*, その先端に、それ(軛)をしっかりとのせ、(帯の先の)輪を *κρικόν* 軛の留釘に *ἔστορι* はめ、(帯を)ぐるりと三度まいて、突起にしばりつけた。それからまた続けてしばりつけると、軛の帯の先を *γλωχίνα* 下にまげて(まきつけた帯のなかに)入れた」(II. 24 265-274, 原文 16)⁽⁵⁾。この悲壮な場面で、息子の死体の代償の品々を運ぶのは、かつてミュシアの人々が王に献じた騾馬がひく4輪の荷車 *ἡνίοιοι ἔλκον τετράκυκλον ἀπήνην* で、御者は王の侍令役のイダイオスである(324)。これに対して王自身は、自分の立派なもち馬のひく車にのりこんで *ἐπεβήσεται δίφρου* (322), 荷車の後についてギリシア方の陣営にむかっている。

この *δίφρος* は荷車ではなく、文字通り *δι* 「2つの」-*φρος* (*φέρω* 「運ぶ」) 「2つの座の, 2人のり」の戦車である。アキレウスが親友のパトロクロスの火葬に臨む場面で、つぎのようにホメロスは歌っている。「アキレウスはすぐに戦い好きのミュルミドネス勢にむかって、青銅の武具を身につけて、各自戦車に *ὕπ' ὄχεσφιν* 馬をつなぐように命じた。そこで人々は立ち上がって武具をつけ、同乗する戦士 *παραιβάται* と御者とが *ἡνίοχοι* 戦車にのった *ἔβαν ἐν δίφροισι*」(II. 23 128-132, 原文 17)。ここで我々は、*δίφρος* の「2つの座」を占める者、つまり *Skr savya-ṣthá-* 「左に立つ(戦士)」に似た同じ意味の *παραιβάται* (sg. *παραιβάτης* = *παραβάτης*, 「*παρα-*(御者の)傍らに」-*βάτης* 「いる(人)」) と *ἡνίοχος* 「御者」の実例をみることができる。そしてまたここで *δίφρος* ではなくて、*ὄχεσφιν* (nom, *τὰ ὄχεια*, ホメロスでは常に n. pl. sg. *ὄχος* m./n.) という「戦車」を詩人は同意語のように用いている。

この叙事詩には、*δίφρος*, *ὄχος* のほかにもう一つの「戦車」*ἄρμα* がある。ここでは類似した文脈にある *ὄχος* と *ἄρμα* の用例をあげておこう。併せてこのはじめの例では、戦車による戦い方もうかがわれる。これは、ギリシア方のピュロスの王ネストルの軍勢の勢揃いの光景と、ネストルの下知の言葉である。「先頭には馬と戦車を伴った騎士たちを *ἰππῆας σὺν ἵπποισιν καὶ ὄχεσφι*, 後尾には戦いの防壁となるべき大勢のすぐれた歩兵たちを彼は配置した。弱い者たちは、その真中においた、否応なしに戦わねばならないようにするために。彼はまず騎士たちに命令した。各自がその馬を制御して、混戦に巻きこまれて混乱してしまわないように命じた。(命令の言葉) なに人も己れの馬術の腕と武勇を信ずるあまり、他人に先駆けて一人でトロイア方と戦おうとしてはならな

いし、また勝手に退いてもならない。(そのようにしたら) お前たちは弱くなってしまふからだ。その戦車から ἀπὸ ὧν ὀχέων 相手の戦車へ ἔτερο' ἄρμα θ' 手がとどくように近付いたならば、槍をもって攻撃せよ。このほうがはるかによいのだから。こうして我らの祖先も、この心と勇気を胸に抱いて幾多の町や城を落としてきたのだ(II. 4 297-309, 原文 18)。つぎの例も、「馬」と「車」 ἄρμα が連続している。「(イリスは) 豪勇プリアモスの息子である勇士ヘクトルが、馬としっかりつくられた戦車に坐っているのをみた」(II. 11 197-198, 原文 19) ここで「馬と戦車に」 ἐν θ' ἵπποισι καὶ ἄρμασι というのは、「馬のひく戦車に」の意であることはいうまでもない。

因みに、ここにあげたイリアス 4 巻 297 行では、「馬と戦車を伴った騎士たち」が後方の「歩兵たち」 πεζοί と対比されている。この「騎士」 ἵππεύς は、「御者」ではなくて、「その傍らにいて」 παραβάτης 戦う人である。ホメロスには ἵππεύς と並んでもう一つ ἵππος 「馬」の派生形 ἵπποτα (ἵππότης) という「(馬のひく) 戦車を駆る」という形容詞が、ネストルのような英雄のきまった枕詞に使われている。常に戦いの先陣をいく戦車にのった騎士は、実戦に乘馬を知らなかった叙事詩の時代の英雄にふさわしい。しかし既述のように、「馬」(ἵππος = ミュケーナイ Myc. Gr. i-qo) を知り、「戦車」(Myc. Gr. i-qi-ja < *hikk* iā f.) を知り、「御者」(ἡνίοχος = Myc. Gr. a-ni-o-ko) をもっていたミュケーナイ時代のギリシアに人は、ἵππεύς はもっていない。また彼らは ἄρμα にひとしい a-mo-ta (pl.) を、「車」ではなくて「車輪」に使っている。また ὄχος に関係があると思われる wo-ka という形が、クノッスではなくてピュロス出土の文書に認められる。これが ὄχος の女性形で文脈の上から「車」をあらわすとみれば、本来は上にあげた i-qi-ja はこの「車」の形容詞で「馬の(ひく)車」という表現が予想される。その場合 wo-ka の消失が、i-qi-ja の名詞化を促したと考えられる⁽¹⁶⁾。それにしても車に関する限り、ミュケーナイ世界と後のホメロスの語るところでは用語の上での一致はみられず、かなりのずれが認められる⁽¹⁷⁾。

それではギリシアよりも早くに進んだ文化をもち、いろいろな意味でギリシア文化の形成に影響をあたえたアナトリアはどうであろうか。高い文明をもっていたメソポタミアに隣接したヒッタイト王国でも、車は大いに利用されていた。それはこの国に滅ぼされたミタンニ国のキックリ Kikkuli とよばれる人の残した馬の調教の書に象徴されるように、馬に関する知識が豊かだったから

である⁽¹⁸⁾。インド・アリア系の人々が王以下の支配階級を占めていたミタンニ国とその周辺の世界では、Skr *márya-*, Av. *mairya-* (m)「若者」に対応すると思われる *marijannu-* が「騎士」をあらわし、後にはこれが貴族の名称になっている⁽¹⁹⁾。つまり、これは戦車を操るエリート軍団に属する人たちの呼称であった。こうした貴族の存在は、インドやギリシアに先がけて車の利用が活発で、戦闘にも威力を発揮していたことを示している。しかしヒッタイト語圏において、Skr. *rátha-*, Gr. *ἄρμα, ὄχος* のような固有の車をあらわす形は明らかでない。文献的にはふつうシュメル語の表記で、木または木製の道具を示す *GIŠ* をつけた MAR. *GÍD. DA* (Akkad, *šumbu*) と、*GIGIR* (Akkad. *narkabtu*) という2つの車があり、前者は主にものを運ぶために牛のひく4輪の重い車をあらわし、後者は馬を使って人を運ぶ2輪車で、戦闘にも活躍する車をあらわした⁽²⁰⁾。

つぎに「車」に関するいくつかの用例をあげておこう。「荷車」は盗難にあらうことが少なくなかったのであろう。ヒッタイト法典には、これに関する規定がある。「もしだれかが荷車 MAR. *GÍD. DA* に荷を積んで、そして野においたままにし、そして(これを)だれかが盗んだならば、その者は3銀シケルを渡す」(ヒッタイト法 II 20, 原文 20)。つぎの例は、軍人が王室への誓いを破ったときの呪いの言葉を述べたテキストの一節である。「そしてお前は彼らの前に粘土づくりの暖炉をおき、鋤と荷車 MAR. *GÍD. DA* と戦車 *GIGIR* の模型をもその前におく。そして彼らはそれらを粉々にこわしてしまふ。そこで彼はつぎのようにいう。この誓いを破る者に対して、天の神は鋤を粉々にこわすべし。そして暖炉からいかなる植物も生えないように、その人の野から大麦も小麦も生えるべからず、そしてそこに雑草がひろがるべし」(軍の誓い RS III 36-45, 原文 21)。ヒッタイト語族が後のハットゥシャ *Hattuša* に都をかまえる前の過程として、彼らがアッシリアの植民市ネシャ *Neša* を攻めたとき、敵対する町には1400の歩兵と40の戦車があったと、アニッタ文書 70-71 行に記録されている。この文書の校訂者である E. Neu によると、A テキストは、欠けている部分を補って考えると、アッカド語の *ŠÍ-IM-TI* 「車」とシュメル語の *ANŠE, KUR, RA* (pl.) 「馬」の連続した表現が予想される。というのは B テキストに、先にあげた *GIGIR* と *ANŠE, KUR, RA* が用いられているからで、B テキストの写し手はアッカド語の *ŠÍ-IM-TI* という形にあまり慣れていなかったの、シュメル語の *GIGIR* のほうを使ったのではないかと Neu は補足している。

いずれにしても、ここで「戦車と馬」という複数の表現が「馬のひく戦車」の意味で用いられていることは興味深い。それは既述のホメロスの *ἐν θ' ἵπποισι καὶ ἄρμασι*, あるいは *ὄν ἵπποισιν καὶ ὄχεσφι* という詩句と一致するからである⁽²¹⁾。

ヒッタイト軍の戦車は非常に優秀であったらしく、御者と槍をもった兵士と、もう一人の守りの兵士の3人が乗ることができた。そしてこれが紀元前1285年、ダマスカスの北のオロンテス川のほとりのカデシュの戦いで、エジプトのラムセス2世の率いる大軍を迎えたヒッタイト王ムワタリスの軍勢が、2500の戦車で勝利を収めた大きな理由とされている。これは一つには、彼らが馬を操ることに熟達していたからであろう。古代の近東世界では紀元前2千年代のはじめころから乗馬も行われていたことは、多くの印章などに彫られた絵などの考古学的な遺品からも明らかにされている。こうした事実や、先に示した「車」に関するシュメル語表記の伝統を考えると、戦車の文化に親しい印欧語族によって、これが北方からこの地にもたらされたと考える必要はない。最近の近東の考古学者の見解に従えば、近東における馬の利用は印欧語族がこの地に進入するよりも早く、その技術もこの地で発達したとみるべきである⁽²²⁾。

この車の技術は、ヨーロッパにも紀元前3千年紀の後半ごろからはっきりと認められている。それは青銅期時代以前のヨーロッパにみられる円盤型の車輪など、車に関係する遺物の分布からも十分に証明される。しかしその後の東部と中部ヨーロッパにおける馬のひく軽い戦車とそれに用いる馬具の使用は、ミュケーナイ文化の影響ではなくて、社会的な需要に応じてこの地で発達した技術とみなされている⁽²³⁾。

ヨーロッパの印欧語族でもっとも早くまとまった車の遺跡を残しているのはケルト語族である。彼らは紀元前7世紀から、彼らの故土と思われているオーストリアのザルツブルクに近いハルシュタット Hallstatt を中心にした2様の車塚 vehicle grave 文化をもっていた。これは墓のなかに車輪などのほか、青銅の車や土器などを埋葬したもので、恐らく土地の有力者が職人に依頼してこうした品々をつくらせたものであろう。この語族はさらに紀元前5世紀以後に属するが、西のラ・テーヌ La Tène 周辺にも、3部分からなる素朴な車輪とともに、同じような車塚をもっているから、彼らは車の文化を自ら独自のものとして誇りに思っていたのであろう。ローマ人もこれに学ぶところがあった

ことは、言語の上にもあらわれている⁽²⁴⁾。

例えば、Lat *plaustrum*, *plōstrum* は 2 輪、あるいは 4 輪の「荷車」である。カトーは「農業について」の一節で、つぎのように述べている。「お前たちのもつ牛、騾馬、驢馬の軛の数だけ、それだけの荷車が *plostra* 必要である」(62. 原文 22)。ウェスパシアヌス帝が、お付きのフロルスから、*au* を *ō* と発音することを戒められ、「*plōstra* より *plaustra* と」いうように注意された翌日、彼はこのお付きを *Flōrus* でなくて *Flaurus* とわざわざよんで挨拶したという逸話が、ステニウスの「ローマ皇帝伝」に残っている(原文 23)。この *plaustrum* という語の起原は明らかでなく、ケルト語系の語がラテン語風に直されたものと推定されている⁽²⁵⁾。

このほかケルト語から *cisium* 「2 輪車」、*covinnus* 「戦車」のほか、借用説が有力とされている車に関係する語に、フランス語 *char*、英語 *car* の源になった Lat. *carrus* がある。この *carrus* はカエサルも「ガリア戦記」(1, 26) に敵方の「荷車」に用いているし、なによりも OIr. *carr*, M Welsh *carr* といったケルト語の形が、そのケルト起原を実証している⁽²⁶⁾。そのほか *carpentum* という女性用の「2 輪車」も紀元前 3 世紀から用例のある、古いケルト語の借用語である。この形にも、OIr. *carpat*, Welsh *cerbyd* といったケルト語が指摘されている。ただしケルト人はこれを「戦車」に使用していた⁽²⁷⁾。*petorritum* という「4 輪車」も、一見ラテン語かギリシア語の合成形のようにみえるが、ケルト人の言葉とされている。*petor-* はオスク語に *petora* = Lat. *quattuor* 「4」があり、*-ritum* は Lat. *rota* 「車輪」を予想させる。ローマ人もその点で疑問があったらしく、ゲリウス Aulus Gellius はその「アッティカの夜」16, 30 で、この形がギリシア語かガリア語かという論議をあげ、考証の結果 *vox Gallica* 「ガリア語」だと述べている⁽²⁸⁾。「車体」の部分をさす *ploxenum* という形も、文法家のクウインティリアヌス Marcus Fabius Quintiliānus の証言などによって、ガリア系とされている⁽²⁹⁾。

終わりに、*essedum* というガリア人の「2 輪の戦車」がある。これは **en-sed-on* (*in-sed-*「坐る」) という合成形で、カエサルの「ガリア戦記」に使われている⁽³⁰⁾。とくに 4, 33 節では、ブリタニアにおけるケルト軍とその戦車を使った戦いぶりが語られている。「彼らはまず戦場をくまなく馬を駆って槍を投げ。そこで馬に対する恐怖心と、車輪の騒音だけで、相手の戦列はたいいてい混乱におちいる。それから彼らは相手の騎兵の隊列のなかに突進し、戦車か

ら *ex essedis* (彼らの戦闘員が) とび降りて徒歩で戦う。その間に御者たちは *aurigae* しいに戦場から後退し、彼ら (戦闘員) が敵の軍勢に圧倒されたとき、すぐに逃げてもどれるようなところに戦車を *currus* 並べておく。こうして彼らは戦場において、騎兵の機動力と歩兵の耐久力を合わせて発揮する。この後さらに続けてカエサルはいう。「彼らはさらに毎日の訓練や実戦によって、坂やけわしい場所を全速力でかけ降りている馬を一瞬のうちに止め、方向転換をさせられるようにしていたし、車の轅にそって *per temonem* 走ったり、軛の上に *in iugo* 立ったり、そこから実にす速く戦車に *in currus* もどれるように習練していた」(原文 24)。このカエサルの言葉から、ケルト人の *essedum* は、4 千人という操縦者 *essedarius* (5, 19) といい、敵を混乱させる脅しの道具であったように思われる。そして彼らは、ホメロスの英雄たちと同じように、戦車から降りて徒歩で戦っていたことがわかる。

このようにみえてみると、ローマ人はかつてはローマをも攻略したケルト人から車の技術のみならず、その用語までも借用したから、彼ら自身のラテン語の語彙としては、*vehō* 「車などで運ぶ」(*Skr váhati etc.*) の派生形 *vehiculum* (= *ὄχημα*) 「乗りもの、車」、*vectūra* 「輸送」、それに *bigae* (< *biiugae*) 「2 頭立ての戦車」、*quadrigae* (< *quadriugae*) 「4 頭立ての戦車」のような合成形を別にすると、先に引用したカエサルの文中に、*essedum* と併用されている、*currō* 「走る」と同じ語根の *currus* (m, gen *currūs*) が指摘されるにすぎない。

これまで古い印欧語族の文献によって、車の利用を見てきたが、車は単にものや人を運ぶ道具として農業や戦闘、競技に使うばかりでなく、その所有は威勢を誇示することにもなり、宗教的なつながりをもつこともある。バラモンという祭官階級が社会的に最高位にあった古代インド人の言葉に従えば、「祭式は神の車 *devaratha* である」(アイタレーヤ・ブラーフマナ 2, 37)。ギリシアをはじめ各地の遺跡において、聖域や墓に車とともに馬や牛の模型がみられるのも、これが貴重なものであったことを示している。イリアス 23 巻には、パトロクロスの葬礼を記念してアキレウスを中心とするギリシア軍の人々によって行われた戦車競技が描かれているが、インドでもソーマ祭の一環である *vājapēya* 「*vāja* (戦う) 力の飲料」の名でよばれる祭がある。そこでは 17 の *rátha* 「車」が *vāja-jít* 「賞をかちとる」ために競技する。また王の灌頂の儀式である *rājasūya* 祭や、馬を犠牲にする *āsvamedhá* 祭においても、車によ

るデモンストレーションが行われた³⁰⁾。

輸送でも祭式でもない車の利用に、これを家のように使う人々の存在がある。彼らは家をもたないで、車を家として移動しながら生活する。こうした人々が数多くいて、ジプシーのように暮らしていたことは、古代の文献にも散見される。黒海の北のほうの広い草原に住むイラン系のスキタイ人について、その自由さをローマの詩人ホラティウスは、つぎのように歌っている。「野に暮らすスキタイ人のほうがもっとよい日々を送っている。彼らの荷車が *plaustra* さまよう家をきちんと運んでいく。きびしいゲタエ人（ドナウ下流にいたトラキア人）でも、そうだ。測ったこともないいくらかの広さの土地が、彼らに自由に果物とパンをもたらしてくれる。一年ごとの耕作は、それ以上長くすることはない。そして仕事を終えた者を休ませて、その代りの者がつぎつぎに同じ仕事につく」（「歌集」3 24 9-16, 原文 25）。このスキタイ人の放浪についてはギリシア以来の伝承があることは確かだが、つぎのアイスキュロスの悲劇「縛られたプロメテウス」の2行は文脈の上からも相通じるところがある。これはプロメテウスが牛の姿になったイオにこれから先の苦惱について語る場面である。「お前は遊牧の民のスキタイ人のもとにつくだらう。彼らはよい車輪をもつ車の上に *ἐπὶ εὐκύκλοις ὄχοις* 高く屋根を編んで住んでいる、遠矢を射る弓を肩にかけて」（709-712, 原文 26）。

このようなスキタイ風的生活は、古代インド人についても報告されている。メガステネスの言葉をうけいれたアリアノスは「インド誌」7, 2-3 節で、つぎのように述べている。「かつてインド人は、農耕をしないスキタイ人と同様に遊牧民であった。彼ら（スキタイ人）は荷車で *ἐπὶ τῆσιν ἀμάξεσσι* さまよい、スキティアのあちらこちらで目を送り、町に住まず、また神々の神聖なものも崇拜しない」（原文 27）。古典サンスクリットの *cakra-cārin-*「車（輪）であちこちに行く（人）」という合成語が、そうした放浪ぶりを反映している。Rau の引くプラナーナに、つぎのような詩句がある。「（我々は）扉や錠でかくされることもなく、また家や土地ももっていない。それよりも、この世のどこでも幸せなのだ、車であちこちに行く人たち *cakracāriṇaḥ* のように」（原文 28）³¹⁾。これは車の上を小屋のようにして生活していた人々をさすのであろう。家そのものも、容易に車で運べるようなものが多かったからであろうか、アタルヴァ・ヴェーダの祭官の家の引っ越しの歌にも、つぎのような一節がある。「我らに束縛をかけるな、重い荷は軽くなれ。家よ *sāle*, 我らはお前を花嫁のように、

好むところに運んでいく（原文 29）。

これまでもいくつかの印欧語族について、車に関する文献とその利用をみてきたが、ふしぎなことにこの語族に共通の「車」をあらわす形はない。既述の Skr. *rátha-*, それに Av. *raθa-* は, Lat. *rota*, OIr. *roth*, OHG. *rad*, Lith. *rátas* 「車輪」から推して、インド・イラン語派のみの転意である⁽³³⁾。この関係は、中央アジアの Toch, (A) *kukäl*, (B) *kokale* 「車」と OE *hweohl* (*wheel*), Gr. *κύκλος* 「輪」, Skr. *cakrá-* 「車輪」の間にも認められる。また Gr. *ἄρμα* も、ミュケーナイ文書の *a-ma-ta* (pl.) は「車輪」である⁽³⁴⁾。

孤立した「車」の形として、イラン語派の Av. *vāša-* という形がある。これは語源的に **varta-* であることは疑いないが、*ā* が長い理由は明らかでない。しかし **varta-* は Skr. *vártate* 「まわる」, Lat. *vertō* 「まわす」などの対応を考慮すると、その意味はやはり車輪の「まわる」ことに因んでいる。これは「荷車」とか「戦車」を特定しない。Benveniste によると、ヴェーダにおいて曙の女神ウシャスの車の形容として *viśvapīśā ráthena* 「あらゆる飾りをもつ車で」(RV 7 75 6) という表現があるが、これはイラン語派のミトラ神の車の *vāšōm vispō. paēšōm* (Yt 10 124) という形容に一致する。またヴェーダの *ráthas...cáturyugas* 「4つの軛をもつ車」(RV 2 18 1) という表現も、イランの *vāšōm čaθruyuxtōm* (Vd 7 41) に再現している⁽³⁵⁾。

語源的に車の動きをあらわす語根と直接結びつけられる「車」は Gr. *ὄχος* (pl. *ὄχρα*) である。これは Skr. *váhati*, Gr. *ὄχέομαι*, Lat. *vehō*, Lith. *vežù*, ocs. *vezq* などの対応に支えられる **weǵh-* 「車でいく、運ぶ」で、名詞形も Lat. *vehi-culum* 「乗りもの、車」, ocs. *vožu* 「車」, OHG. *Wagan* 「車」, OIr. *fēn* 「車」など豊富である。因みに、Goth. *wigs*, OE. *weg*, OHG. *weg* (*way*, *weg*) もこれに関係し、本来は「車のいく道」であったとすると、この語根こそ祖語の時代の素朴な乗りものでの往來の記憶を伝えるものだろう。これ以外に「車」そのものの対応がみ当たらないということは、その使用が祖語の非常に新しい段階に属していたことを示唆している。

つぎに車の主な部分について、その対応を検討してみよう。まず、「車輪」だが、これは英語 *wheel* の伝える古い印欧語の語彙である。Skr. *cáрати*, Av. *čaraiti*, Gr. *πέλομαι*, Lat. *colō* など、**k^wel-* 「(歩いて) 動く」という語根の重複形「歩きまわる」が Skr. *cákra-*, Gr. *κύκλος*, (pl.) *κύκλα* (Toch. A. *kukäl*, B.

kokale「車」)の「(車)輪」の基礎になっている。OCS. kolo, Russ. koleso は、重複のない -es- 語幹である。印欧語族のもつもう一つの「車輪」は、既述の Skr. rátha- に対応する一連の形だが、これはイタリック、ケルト、バルト、それにゲルマンの一部に分布する、ヨーロッパ群のものである。なおトカラ語は Skr. cakra- に対応する形を「車」にあてたので、「車輪」には (A) wärkänt, (B) yerkwantai (叙格) をもっている。これが Hitt. hurgi- とともに、Skr. vr̥ṇákti 「まわす、むきをそらす」、Lat. vergō 「むける」などの対応に属するかは疑問である⁽³⁶⁾。

「車輪」は古来の「日輪」という言葉が示す通り、太陽の象徴である。ギリシアに人も χρύσεια κύκλα ἡελίου 「太陽の黄金の車輪」(Anthologia Graeca 14 139) と表現している。リグ・ヴェーダの謎の歌 1 164 2 にも「7 は 1 つの車輪の車を rátham ékacakram 装備する。7 つの名ある 1 頭の馬が (これを) ひく。車輪は 3 つのこしきをもち trinábhi 老いることなく、おかされることなく、そこに一切の万物が乗る」(辻訳 300, 原文 30)。これは時の象徴としての太陽を暗示するもので、7 は太陽の車をひく 7 頭の馬をさすという。太陽の車はときに 1 頭、ときに 7 頭の栗毛の馬にひかれるといわれ、3 頭のこしきとは 1 年をつくる 3 季節を示唆している。この太陽との連想と、一方では車をもつ威力が重なって、「車輪」cakra- は支配のシンボルとなり、Skr. cakravartin- 「車輪をまわす人」は「王」となる⁽³⁷⁾。そしてこれがブッダの教えに転ずると、Pali dhamma-cakka-pavattana- (Skr. dharmā-cakra-pravṛtana-) 「転法輪」となる。しかしこれは、まわる車輪よりも、車のもつ力があたえるもので、本来の「車輪」のもつイメージといえば、やはりその回転していく姿にある。古代インドの格言にも「福にはすぐに禍が、禍にはすぐに福がくる。車輪のように、禍福はまわってくる」(7083)。あるいはまた「福にはすぐに禍が、禍にはすぐに福が、輻 (スポーク) が arā 車輪の枠 (リム) に nemim (つきまとう) ように、ぐるぐると人につきまってくる」(7085, 原文 31)。

つぎに「車軸」についてみると、その主な対応は Skr. ákṣa-, Gr ἄξων, Lat. axis, Lith. ašis, OCS. osī, Russ. os', OHG. ahsa (Achse), Welsh echel である。この *aks-i/n- を基本とする形は、その語幹の構成からみてかなり古い語彙と考えられる⁽³⁸⁾。

現在の英独語の yoke, Joch, 仏語の joug, ロシア語 igo の対応は、珍しいほど諸派の thematic 形に一致が認められる。Skr. yugá-, Av yuga-, Gr. ζυγόν。

Lat. *jugum*, Goth. *iuk*. OE. *geoc*, OHG. *joh*, OCS. *igo*, Lith *jùngas*, OIr *cuing* (< **ko-jung-i*). Arm. *luc* のほか、アーリア語からの借用説も有力な Hitt. *iuga-*, さらにトカラ語 (A) *yokäm* 「門, 扉」がある⁽³⁹⁾。ただしこのトカラ語の形の意味と「軛」との接点は明らかでない。「軛」としては (A) *muk* があるが、これも語源は不明である。(B) *pyorye* はまったく異なる形である。この **yug-o-* という中性の「軛」がどの語派にも失われずきた理由としては、「軛」は車の一部というよりも、それ以前に牛などをしばって耕作をするために使用したからであろう。従って、これは車の部分というより、農耕の語彙に属する。

この **yug-o-* は語根 **yeug-* 「しばる, つなぐ」(Skr *yunákti*, Gr. *ζεύνομαι*, Lat. *jungō* etc.) の弱階梯である。この動詞は具体的にいえば「車に馬をつなぐ *yuñjáte…aśvān rátheṣu*」(RV 2 34 8) とか、「車に牛と騾馬をつなぐ *ὄπι' ἀμάξῃσιν βόας ἡμιόλους τε ζεύγυσσαν*」(Il, 24, 782-83) という表現に用いられ、本来は車にも深く関係している⁽⁴⁰⁾。

車軸の芯になる部分「こしき」は「へそ」である。Skr. *nábhi-*, *nábhya-* (n) (Av. *nāfa-* 「一族」), OE *nafu*, OHG. *naba* (*nave*, *Nabe*) のほか、-*!* を伴った派生形が多い。Gr. *ὀμφαλός*, Lat. *umbilicus*, OIr. *imbliu*, OE. *nafela*, OHG. *nabala* (*navel*, *Nabel*) は「へそ」に限られている。ギリシア語は独自に *πλήμνη* という語をもっている。恐らくこのスポークの集まる部分は本来の名称がなく、必要に応じて「へそ」の転用, あるいはその派生によって生まれた形である。

ヴェーダの詩人はこの *yugá-*, *nábhi-*, *nábhya-*, それに動詞 *yuj-* をしばしば比喩に用いる。救済と医療の双神アシュヴィンへの祈りの言葉はいう。「2隻の船のように我らを彼方に渡せ, 軛のように, こしきのように, 車輪をつくる両側の半円形の板 *pradhí* のように, 車輪の3枚板を固定する棒 *upadhí* のように。犬のように我らの身体を守り, 甲冑のように我らを崩壊から守れ」⁽⁴¹⁾ (RV 2 39 4, 原文 32)。宇宙を支える柱であるスカンバ *skambha* の歌に, つぎのような一歌がある。「そこには神と人が, 輻がこしきに (よる) ように依止し, そこには幻力によって水中の花 (創造神の名) がおかれている。その (創造の源) とところを我らはお前に問う」(AV 10 8 34, 辻訳 216, 原文 33)。家族の和合をうるための呪文にも, 車の比喩が使われている。「年長者に従い, 思慮深く, 離散することのないように。協力して同じ軛のもとに振る舞い, 互いに言葉を優しく語り来たれ。私はお前たちを, 結束固く同じ心をもつ者にす

る。お前たちの飲む水は共通であれ、その食べ物の分配は等しくあれ。共通の馬具にお前たちを私はずなぐ。一致してアグニ神を崇拜せよ。輻がこしきの回りに（集まる）ように」（AV 3 30 5-6, 辻訳 118, 原文 34）。

これまでにふれた以外の車の部分については、はっきりとした対応がまとまらない。例えば、先にふれた「輻、スポーク」だが、その発達は新らしく、語派ごとに形が異なる⁽⁴²⁾。本来車輪は石や木でできた円盤状のものからはじまり、ずっと後にこれを軽くするために十字状にスポークがはいる。これはミュケナイ文書の使用する「車輪」の補助的な絵文字にもはっきりとあらわれている。これから徐々にスポークの数が増えてくる。これが車輪を強固にし、ひいては速く走る車の耐久力を増すのに重要な要因となったが、その発展の段階は各地でさまざまである。既述の Skr. arā- に対し Gr. κνήμη は本来は「太股」、後に医学では「脛骨」をあらわす語であるが、ホメロスの οκτά-κνήμα 「8本のスポークの（車輪）」（Il. 5 723）のような表現から、その使用はかなり古いことも明らかである。Lat. radius は「棒」である。ゲルマン語の OE spaca, OHG. speihha (spok, Speiche) は孤立的である。Russ. spica < *stipica, Lith. stipinas も、その形はバルト・スラヴ語派に限られている。

アナトリア諸語の車に関する印欧語本来の形はあまりわかっていないが、そのなかで Skr. iṣā-, Av. aeša (dual) 「鋤」と Hitt. hišša- の「轆」の関係は早くから注目されてきた。これ以外には Gr. ὀψή (原文 16, οἰήκεσσυ), οἶαξ 「軛につけた輪」があるが、確実な対応はない。ただスラヴ語に Russ. voje, Slov. ojê という形があり、この系統の形が借用語として Finn. aisa など、他の語族の言語に残っているのは興味深い⁽⁴³⁾。問題の Hitt. hišša- については、ミタンニを中心に活躍したインド・アーリア系の人の言語からの借用説もあるが、h- の存在もあり、現在では本来の対応とみる説が有力である。iṣ- / hiš- / oīh- からは *HeiHs-eH- のような形を仮定しなければならない⁽⁴⁴⁾。因みに、この対応以外の「轆」、つまり車の後部の車輪の下から軛にいたる中心の1本ないし2本の棒をあらわす語をみると、英語の pole, shaft のような間接的な表現は別にして、ドイツ語の Deichsel は OHG. dihsala をはじめゲルマン語に対応があるほか、バルト語の OPru. teausis < *teng-s-jo- があり、ORuss. tjagati 「ひく」などの動詞語根との関係も指摘されている⁽⁴⁵⁾。これと平行しているのが Gr. ῥύμος で、これも動詞 ῥύω 「ひく」（ῥύτηρ 「手綱」）との関係は疑いない。これは「轆」が車を「ひく」のに中心的役割を果していたからで

あろうか。

hišša- と並んでヒッタイト語の対応が問題になるのは, Hitt *tūrija-* 「つなぐ, 馬具をつける」と Skr. *dhúr-* (nom sg *dhús*) である。このヒッタイト語の形の用例を「ヒッタイト法」からあげると「牛が野を歩いていて, 野の主が(それを) みつけたら, 彼は(それを) 1日つないでおく。星がでるとすぐに, 彼はそれをその主人につれもどす」(I 79, 原文 35)。Skr *dhúr-* はしばしば *ráthasya dhúr-* という表現で用いられ, 「馬などを車につなぐのに使う道具」であり, 伝統的には *yugám* 「軛」, あるいは *iṣā-* 「轅」と同意に理解されてきた。「わが祈りの言葉に來れ, インドラよ, 車の轅に *dhuri ráthasya* すべての 2頭の栗毛の馬をつけよ。確かにお前は多くのところに招かれるべきものである。勇者よ, この(ソーマ)液に酔え」(RV 2 18 7, 原文 36)。ベートリック・ロートの辞書には, 車につなぐ動物の肩にのせる軛の一部分を考えているが, それ以上には特定しにくい。派生形としては *dhúrya-* 「駄獣」, *dhūr-śád* 「御者」, *sá-dhura-* 「*dhur-* をともにする」がある。この2つのヒッタイトとインド語派の形について, Hitt *hišša-* と同様にインド語からの借用の可能性も検討された。もし対応を認めるとすれば, この語根名詞は **dhvṛH* のような再建形を予想することになるが, 他の語派の確実な対応がみられないために, 確証に至らなかった⁽⁴⁶⁾。ところがリグ・ヴェーダの *yunkte dhuri gá ṛtásya* 「天則の牛を軛(轅)につなぐ」(RV 1 84 16) という表現を思い出させるような *dhur-* の派生形と思われる形が, 中央アジアのサンスクリットとトカラ語の併列のテキストに認められた (A テキスト Nr. 361, 梵文テキスト欠)。それは Toch(A) *tursko* 「車をひく牛, 駄獣」で, 語根的には **dhvṛHes g'ōus* 「軛(轅)の牛」という合成形とみなされる。この解釈の著者 K. T. Schmidt によると, これは Pali *dhoraḥya-* (Sutta-Nipāta 79 etc.) という変わった綴り字の語を想起させ, サンスクリットでいえば *dhúr-* の派生形 *dhaureya-* 「*dhúr-* をつけた(牛), 駄獣」にひとしい。これは本来は「つなぐに適した」(Pāṇini 4 4 77) の意で, ここに *dhúr-* と *tūrija-* の接点もはっきり認められる。これによって, この対応は印欧語としてより確実なものとなった。両端のきれたこのトカラ語の原文は 15 行からなり, サンスクリットまじりのもので, 文意を正確につかめないのが, 内容的にこれに近いとされる スッタ・ニパータ 79 を示そう。「努力が私の軛をつけた牛 *dhuradhorayham* であり, 安穩の境地に運ぶ。退くことなく進み, そこに至れば憂えることがない」(原文 37)⁽⁴⁷⁾。

《注》

- (1) S. Piggott: *The Earliest Wheeled Transport From the Atlantic Coast to the Caspian Sea*, London 1983, 24f.; *ib.*: *Wagon, Chariot and Carriage*, London 1992, 17.
- (2) Piggott 注(1) 1983, 29, 60; 1992, 20f.: クルガン文化については拙著, 印欧語の故郷を探る。岩波新書, 1993, 100-105。
- (3) H. Zimmer: *Altindisches Leben*, Berlin 1879, 246; M. Sparreboom: *Chariots in the Veda*, Leiden 1985, 135. *ánas*-(n)「荷車」の意味は, これと正確に対応する *Lat. onus*-(n)「荷」にも認められる。
- (4) この *anaḍvāh-* という合成形の *ḍ* と, *-vah-* の格変化 (nom. sg. *-vān*) の不規則性の説明は容易ではない。J. Wackernagel: *Altindische Grammatik I*, Göttingen 1896, 339 § 285 bβA では **ano-vah-*, **ana-uḍ-* から **anaḍ-*, さらに *anaḍ-vah-*, *anaḍ-ud-* を考える。なお同書 1957, L. Renou による *Nachträge* 192 では, **anarvāh-* を仮定している; A. Thumb-R. Hauschild: *Handbuch des Sanskrit II*, Heidelberg 1959, 115f.; S. W. Jamison: *A Cart, an Ox, and the Perfect Participle in Vedic*, MSS 52, 1991, 77-100 では *ánas-* の loc. pl. **ánat-su* から *-t/ d-* を考え, れから *-vah-/ -uh-su* (loc.) という格変化の過程での *cerebralization* を想定する; M. Mayrhofer: *Etymologisches Wörterbuch des Altindischen Bd.1*, Heidelberg 1992, 69。
- (5) 古代インドの婚礼で, 新婦を車で新郎の家へ導く儀式 (*skr. udvāhana* という) については, 辻直四郎: 古代インドの婚姻儀式, ヴェーダ学論集, 東京, 1977, 282-329 の 314f.
- (6) 「軛の止め金」*pātalyè* (du.) の意味は不明。Geldner の RV 訳では 'Wagenstützen' とし, Renou (EVP 17, 1969, 94) は 'chevilles-du-joug'。後者のほうが *Sāyaṇa* の注 *patanaśīle kilake* 「落ち易いピン」に近い。
- (7) 疾走する *rātha-* をふくめて, 花嫁を運ぶ車などにも, 車軸をはじめとして故障があったことについては, Sparreboom (注(3)) 19f.
- (8) 図版を伴った古代インドの車の構造については, S. Piggott: *Prehistoric India*, Penguin 1950, 273-281 (p. 28 図版参照); W. Rau: *Zur vedischen Altertumskunde*, Wiesbaden 1983, 22-35。
- (9) *khā-* の意味の変化については L. Renou: *Les éléments védiques dans le vocabulaire du sanskrit classique*, JA 1939 321-404 の 328。語根 *khan-*「掘る」との関係は疑問。Mayrhofer *Wb.* (注(4)) 442; J. Wackernagel-A. Debrunner: *Altindische Grammatik II/2*, Göttingen 1954, 32 § 11 bβ。なおギリシア語にも *su-khā-* に似た合成形が車の形容にみられる。例えば, *εὖ*「よい」と *τροχός*「車輪」(*τρέχω*「走る」)の合成で *εὐτροχός*「よい車輪をもつ, 疾走する」は, ホメロスでは *ἄμαξα, ἄρμα* のいずれの「車」についても用いられている (Od. 6, 72, II. 8, 438 など)。また *εὖ* と *κύκλος*「輪, 車輪」からなる *εὐκύκλος* が *ἀπήνη*「荷車」の形容にみられる (Od. 6, 69-70)。これは *skr. su-cakrá-* (RV X 85 20, *rātha-* の形容) にひとしい。
- (10) この2つの「車」については Sparreboom (注(3)) 124, 128。おもしろいことに *śákata-* という語源不明の語は, Pali *sakata-* など中期インド・アリア語

- を経て近代諸語に広く生きている。Mayrhofer (注(4)) Wb. 2 1996 601f.; R. L. Turner: A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages, Oxford 1966, Nr. 12236. その意味では早くに消失した *ánas-*, 近代には比較的わずかな分布しかもたない *rátha-* (Nr. 10602) より *śakaṭa-* のほうが民衆に根ざした語彙であったといえよう。そうした性格は、森の女神アラニアーニーを歌った幻想的な詩 RV X 146 3 の (辻訳 81), 夕暮にこの女神のよぶ声が, *śakaṭír iva sarjati* 「車のよぶようにぎしぎしという」という一節にもうかがわれる。
- (11) Piggott Prehistoric India (注(8)) 278 によると, ホメロスの語る戦車はもとより, 先史時代のケルト語族の車輪にも輪金が使用されていた。
- (12) Rau (注(8)) 32f.; 古典期の叙事詩の時代になると 4 頭立ての戦車も使われた。その場合には 2 頭が中心部の轅に, 他の 2 頭は外側につなわれ, 御者は 2 人であった。E. W. Hopkins: The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India, Varanasi 1972, 181 (= TAOS 13 1889 57-372)。
- (13) *sūtá-* という形の *-ta* の解釈には問題があるが, *suváti* 「動かす, 駆りたてる」との関係は否定できない。T. Burrow: The Sanskrit Language, London 1955, 167 **sū-t-* の仮定; M. Mayrhofer: Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen Bd.3, Heidelberg 1976, 491。
- (14) R. Plath: Der Streitwagen und seine Teile im frühen Griechischen, Nürnberg 1994; クノッソス出土の車の目録については S. Hiller-O. Panagl: Die frühgriechischen Texte aus mykenischer Zeit, Darmstadt 1976, 213-221。
- (15) W. Leaf: The Iliad vol.2, Amsterdam 1960 (London 1902), 623-630; J. Wiesner: Fahren und Reiten (Archaeologia Homerica), Göttingen 1968, F7-9 (p. 28 図版参照)。
- (16) *άρμα* = Myc. Gr. *a-mo-ta* (pl.) については注(14)) にあげた Plath 71 以下 (主にクノッソス So 文書), *ὄχος* = *wo-ka* については同書 97 以下 (ピュロス Sa 文書) にくわしい。
- (17) このずれがミケナイ文書とホメロスという文献の性格の相異によるもので, 実際にはつながりがあったとみることも可能であろう。A. Heubeck: Aus der frühgriechischen Lineartafeln, Göttingen 1966, 85. なお Heubeck は, H. Mühlstein の指摘として, Myc. *i-qi-ja* 「戦車」の伝統を伝える語として, ホメロスに 2 例ある *ἰππιο-χάρμης* (*χάρμη* 「戦いの喜び」, *χαίρω* 「喜ぶ」) という「騎士」をあげている (Il. 24 257, Od. 11 259. いずれも個有名詞の形容に使われている)。「戦車」に関する用語について, ミケナイ資料とホメロスとの間の相異は Plath (注(14)) 397 の対照表に明らかである。車の部分をあらわす語彙で一致するのは, *ἄξων* = Myc. *a-ko-so-ne* (skr. *ákṣa-*) 「車軸」, *ἡλία* = Myc. *a-ni-ja* 「手綱」の 2 語である。
- (18) インド語派の語彙をふくむこの問題のキックリのテキストについては, 最近実際の馬術の立場から新しい解釈が加えられている。F. Starke: Ausbildung und Training von Streitwagenpferden, Wiesbaden 1995. ヒッタイト語族の戦車とその利用については J. G. Macqueen: The Hittites, London 1986, 57-59; O. R. Gurney: The Hittites. Penguin 1990, 86f. (エジプト人が描いたヒッタイト戦車の絵が残っている)。

- (19) M. Mayrhofer: Die Indo-Arier im alten Vorderasien, Wiesbaden 1966, 19; ib.: Die Arier im vorderen Orient-ein Mythos?, Wien 1974, 16; G. Wilhelm: Grundzüge der Geschichte und Kultur der Hurriter, Darmstadt 1982, 26f.; Starke (注(18)) 127A 266。
- (20) MAR. GID. DA に相当するアッカド語に、J. Friedrich のヒッタイト語辞典は *šumbu* という形をあげているが、W. v. Soden: Einführung in die Altorientalistik, Darmstadt 1985, 106 では *erequ* としている。M. A. Littauer-J. H. Crowel: *Wheeled Vehicles and Ridden Animals in the Ancient Near East*, Leiden 1979, 64 も Soden と同形をあげている。Soden によると、専門職人がつくる 2 輪車は、はじめは重い板の車輪を使っていたが、紀元前 1500 年以後は 6 本のスポーク、さらに後には 8~10 本のスポーク車輪が一般化され、長旅にも利用された。なおヒッタイト語の「戦車」をあらわす語が明らかでないことについては、J. Tischler: *Bemerkungen zum 'Raum-Zeit-Model'*, Indogermanica Europaea, Festschrift für W. Meid, Graz 1989, 407-429 の 414f.。ここで Tischler は、Skr. *rátha-* < **roth-o-* の示す thematic の語幹は共通基語のもっとも後期に属するもので、ヒッタイト語はそれより早い中期の段階において基語から分離したからではないかと推定している。しかしこの言語は一方で、車の部分に関する印欧語の語彙をいくつかもっている。*iuga-(n)* 「輓」(Skr. *yugá-* etc.)、*hišša-* 「輓」(Skr. *išá* etc.)、*tūrija-* 「つなぐ、馬具をつける」(Skr. *dhúr-* 「馬を車につなぐのに使う道具」)、*hurgi-* (*hurki*) 「車輪」(**Hwerg-* 「廻す」*Lat. vergō* 「むける」)。なお Strake (注(18)) 126A 259 によると、象形ルウィ語 (*h-luw.*) に *qarzannin-* と読める形があり、これは先にあげた *hurgi-* 「車輪」に所有をあらわす接尾辞 *-ann(i)-* をつけた「車輪をもつ (=車)」と解される。
- (21) E. Neu: *Den Anitta-Text*, Wiesbaden 1974, 14-15, 35, 51。
- (22) Littauer-Crowel (注(20)) 71, 93。ホメロスでは、ふつう戦車に乗った騎士も、戦うときは車から降りて戦闘をしている。例えば、Il. 17 480 では、アウトメドンは、アルキメドんに馬を駆る鞭と手綱をととってくれと頼んでから「私は戦うために車を降りよう」*ἔγω δ' ἵππων ἀποβήσομαι, ὄρα μάχωμαι* といって車から降りて、ヘクストールとアイネイアスにむかっていく。もちろん例外もみられる。既述の Il. 4 297 以下のネストルの言葉、あるいは同 5 巻の冒頭で、トロイア方の祭司ダレスの 2 人の息子がディオメデスに立ちむかう場面で、一人は戦車に乗り、一人は徒歩である。そして戦車から投げた槍はディオメデスに当らず、逆にディオメデスの投げた槍が胸に的中し、彼を「馬からころげおとしてしまった」*ὡσε δ' ἀπ' ἵππων*。G. S. Kirk: *The Songs of Homer*, Cambridge 1962, 189。ヒッタイトの戦車の描かれた遺品をみると、騎士は槍と弓をもって、乗ったまま弓をひいている。従ってギリシア人がこうしたエジプトや小アジアの戦車の使い方を知っていたとしたら、むしろこの例外のほうが一般的であるように思われる。とすれば、戦車を降りて一騎打ちというのは、まだ戦車の戦いが行われなかった本当の英雄時代の記憶がそのまま伝承されたものであろうか。因みに、この戦法は後述するカエサルの伝えるブリタニアのケルト軍の *essedum* 「戦車」の使い方にうかがわれる。
- (23) S. Piggott: 1983 (注(1)) 63, 104。

- (24) ケルト語族の車と車塚については, S. Piggott: *Ancient Europe*, Edinburgh 1973, 179-185; ib. 1983 (注(1)) 138 以下にくわしい。また同じケルト系の人々がアイルランドに残した車については B. Raftery: *Horse and Cart in Iron Age Ireland*, JIES 19 1991, 19-71 にくわしい図版がある。
- (25) A. Walde-J. B. Hofmann (WH): *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*, Bd.2, Heidelberg 1954, 320; A. Ernout-A. Meillet (EM): *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 4. ed., Paris 1959, 513。-au- とかくのは hyperurbanism で, plaudō「たたく」の影響があるといわれる。これは *plaud-trom という理解によるもので, ある位置では車の各部がゆるんで「がたがたいう」からだという。
- (26) Walde Hofmann (注(25)) Bd.1 1938, 174; Ernout-Meillet 102 によると, ローマ人はケルト系のガリア人の使う 4 輪の大きな荷車をもっていなかった。ローマ人は定住的な農民だったからである。ガリア人はこの車を荷物の輸送のみならず, 夜には野営地の周りをこれできり取り囲むのに使っていた。つまり, 物の運搬と軍の移動, 護衛にこの車は有効であった。なおケルト系の形については, J. Vendryes: *Lexique étymologique de l'irlandais ancien C*, Paris 1987, 41f.
- (27) WH (注(25)) Bd.1, 171; EM 101, Vendryes (注(26)) 40f.
- (28) WH Bd.2, 298; EM 504。
- (29) WH Bd.2, 324; EM 516。
- (30) WH Bd.1, 421; EM 202。
- (31) Spareboom (注(3)) 28 以下にくわしい。祭式, あるいは戦いにおける車の重要性から, rathakāra-「車作り」(原文 13) の職人は, その技を評価された。しかしインドでは, ふしぎなことにこの職人は, 王とヴァイシュヤ vaiśya (庶民, 第 3 階段) の女のような混合カーストの者の後裔とみる伝承がある。W. Rau: *Staat und Gesellschaft im alten Indien*, Wiesbaden 1957, 112; Sparreboom (注(3)) 134f.。ギリシアにもホメロスに 1 回 ἀλῆρ「人」を伴って ἀρματοπηγός という語が Il. 4 485 にみられる。これは ἄρμα と πῆγνονι という語根の合成形だから, skr. -kāra- のように単純に「つくる」というより, 各部分を合わせて「しっかりとさせる」のが原意であろう。これは ἄρμα-ἀραρίσκω「つけ合わせる」の関係に似ている。ギリシア人にとっては, 車をつくるというより, 車を組み立てる, というイメージが強かったのでであろう。なおギリシアにおける車の宗教的な扱いについては Wiesner (注(15)) 73f.
- (32) Rau (注(8)) 22, 34f.
- (33) この「車輪」の対応は, さらに OIr. rethim「走る」, Lith. ritù「回転さす」という動詞形から, *ret(H)-「走る, 回転する」という語根に結びつけられている。Mayrhofer (注(4)) Bd.2 1996, 429f.; Vendryes (注(26)) R, 1974, 23。同様に「走る」と「車輪」の関係は, ケルト系の借用形としてあげた Lat. carrus, それに本来の Lat. currus -Lat. currō「走る」, あるいは Gr. τρέχω「走る」-τροχός「車輪」, OIr. droch「車輪」にも認められる。H. Frisk: *Griechisches etymologisches Wörterbuch* Bd.2, Heidelberg 1970, 925f.
- (34) この ἄρμα は動詞 ἀραρίσκω「つけ合わせる」との語根の関係が一般に認められている。車に関係したミュケーナイ文書には a-ra-ru-ja (=ἀραρυία) のようなこ

- の動詞の完了分詞女性形も使われている。しかしこの動詞語根 *Her-「合わせる」を「車」について用いているのは、skr. ará-「輻、スポーク」と ocs. jarimŭ (Russ. jarmo)「輓」だけである。また Lat. arma「武器」をみても、「合わせる」対象は判然としない。一説には、車の輓がしばられる中心の太い棒と、後部の車体とを「合わせる」ことだという解釈もあるが、文献的には証拠に乏しい。J. Manessy-Guitton: *Recherches sur la terminologie du char en védique, en mycénien et chez Homère, Études indo-européennes* 20 1987, 1-17 の 4f.; M. Vasmer; *Russisches etymologisches Wörterbuch* Bd.3, Heidelberg 1958, 493; Mayrhofer (注(4)) 107。その意味では「荷車」の *ἄμαξα* も、*ἄμα*「ともに」-*ἄξων*「車軸」の合成、つまり *ἄμαξα κύκλα*「車軸をつけた車輪」のような表現から独立したとする解釈のほかは、小アジア起源とされている。Frisk (注(33)) Bd.1, 1960, 85f.
- (35) *vāša-* については K. Hoffmann: *Avestisch 3, Festschrift H. Humbach* (MSS Beiheft 13), München 1986, 163-83 の 172f.; Mayrhofer (注(4)) Bd.2, 518f.; E. Benveniste: *Phraséologie poétique de l'indo-européen, Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou*, Paris 1968, 73-79。
- (36) *Hitt. hurgi-* については (注(20)) 参照。トカラ語の形については、A. J. van Windekens: *Le tokharien confronté avec les autres langues indo-européennes, vol.1*, Louvain 1976, 55。
- (37) J. Gonda: *Ancient Indian kingship from the religious point of view*, Leiden 1969, 123f.
- (38) E. Benveniste: *Origines de la formation des noms en indo-européen*, Paris 1935, 7, 24。
- (39) *Arm. luc* の *l-* には問題がある。G. R. Solta: *Die Stellung des Armenischen im Kreise der indogermanischen Sprachen*, Wien 1960, 42。ロシア語には *jarmo* という形もあるが、これは *arimo で、skr. ara-「輻、スポーク」と同源である。
- (40) この動詞は、しばしば詩的な比喩にも用いられている。それについては M. Durante: *Epea pteroenta. Die Rede als 'Weg' in griechischen und vedischen Bildern. Indogermanische Dichtersprache*, hrg. von R. Schmitt, Darmstadt 1968, 242-260 の 249。B. Oguibénne: *les correspondants de védique YUJ- et yóga- dans le vocabulaire et les thèmes poétiques indoeuropéens*, BSL 79 1984, 131-53。
- (41) *pradhī, upadhī* については Rau (注(8)) 22。
- (42) O. Schrader-A. Nehring: *Reallexikon der indogermanischen Altertumskunde*, 2. Auflage, Berlin 1917-23, Bd.II 421, *Speiche* の項。
- (43) Vasmer (注(34)) Bd.1, 213。
- (44) F. Sommer: *Altindisch dhur-*, *Sprache* 1 1949, 150-63 の 161; E. Benveniste: *Hittite et indoeuropéen*, Paris 1962, 14; J. Tischler: *Hethitisches etymologisches Glossar I*, Innsbruck 1983, 252f.; M. Mayrhofer: *Hethitisch und Indogermanisch*, *Sprache* 10 1964, 174-197 の 185f.; *ib.* *Hethitisches und arisches Lexikon*, 1770 1965, 245-57 の 253f.; *ib.* (注(4)) Bd.1, 208; J. Puhvel: *Hittite Etymological Dictionary vol.3*, Berlin 1991, 318f.

- (45) この語根はさらに *ten-g- と分析され, *ten- 「のぼす, ひく」 (skr. tanóti, Lat. tendō etc.) に還元される。なおロシア語には MHG. dihsel の借用と思われる *dyšlo* のほか, *oglóblja* という形もある。vasmer (注(34)) Bd.1, 386, Bd.2, 251f.
- (46) F. Sommer (注(44)) ; Benveniste (注(44)) 14; H. Eichner: Die Etymologie von heth. mehur, MSS 31 1972, 53-107 の 74; Mayrhofer (注(44)) 1964, 185f., 1965, 251f. (同源でなく, 借用説)。ただし Mayrhofer (注(4)) Bd.1, 794 では後述の Schmidt 説をとりいれて同源説を考え, Gr. *θαιρός* 「扉の蝶番, 車軸」を対応としてあげている。Tischler (注(44)) III, 458-462。なお skr. dhūr- については Rau (注(8)) 24, 28f.
- (47) K. T. Schmidt: Zu einigen Archaismen in Flexion und Wortschatz des Tocharischen, Studien zum indogermanischen Wortschatz, hrg. von W. Meid, Innsbruck 1987, 287-300 の 274f.。なおここに引用したパーリ語の原文の dhorayha- を含む形は dhura-dhorayham である。dhura- は skr. dhūr-(a) にひとしく, 「軛」であり, dhorayha- は dhur-vahya- 「dhur- をひいている (牛) 駄獣」と解されているが, これには他の写本に dhuradhoreyyam の読みがある。いずれにせよ, この合成形自体 2 つの dhur(a)- をふくむのは理解しにくい。

引用原文

- 1) RV III 33 10 á te káro śrṇavāmā vácāmsi yayátha dūrād ánasá ráthena / ní te naṃsai pipyānéva yósā máryāyeva kanyā śaśvacai te //
- 2) RV VIII 91 7 khé ráthasya khé 'nasaḥ khé yugásya śatakrato / apālám indra trīṣ pūtvya ákrṇoḥ sūryatvacam //
- 3) RV X 85 11 ṛksámábhyām abhíhitau gávau te sámanāv itaḥ / śrotram te cakrē ástām divi pánthás carācaraḥ //
- 4) RV III 53 17-20 sthiraú gávau bhavatām viḍúr ákṣo mészá ví varhi má yugám ví śári / indraḥ pátalyè dadatām śáritor áriṣṭaneme abhi naḥ sacasva // bálam dhehi tanúsu no bálam indránaḍútsu naḥ / bálam tokáya tánayāya jiváse tvám hí baladá ási // abhi vyayasva khadirásya sáram ójo dhehi spandané śimśápāyām / ákṣa viḍo viḍita viḍáyasva má yámād asmád áva jihipo naḥ // ayám asmán vānaspatir má ca há má ca ririṣat / svasty á grhébhya ávasá á vimocánāt //
- 5) RV V 35 7-8 asmákam indra duṣtáram puroyāvānam ájiṣu / sayāvānaṃ dháne-dhane vājáyantam avá rátham // asmákam indréhi no rátham avá púramdhya / vayám śaviṣṭha váryam divi śrávo dadhimahi divi stómam manāmahe //
- 6) RV X 75 9 sukhám rátham yuyuje síndhur aśvínaṃ téna vájam sanīṣad asmínn ájau / mahán hy áśya mahimá panasyáté 'dabdhasya sváyaśaso virapśinaḥ //
- 7) RV VIII 77 3 sám ít tán vṛtrahákhidat khé arán iva khédayā / právrddho dasyuhábhavat //
- 8) RV VII 69 1 á vām rátho ródasi badbadhāno hiraṇyáyo vṛṣabhir yātv

- áśvaih / ghṛtāvartaniḥ pavibhī rucaná iśām vodhá nṛpátir vājínivān //
- 9) RV X 89 4 indráya giro ániśitasargā apāḥ prérayam sāgarasya budhnát / yó ákṣeṇeva cakriyā śácībhir viśvak tastāmbha pṛthivím utá dyám //
- 10) Ch. Up. 4 16 5 sa yathā ubhaya-pād vrajan ratho vā ubhābhyām cakrābhyām vartamānaḥ pratitiṣṭhati, evam asya yajñāḥ pratitiṣṭhati.
- 11) RV X 33 5 yásya mā harito ráthe tistró váhanti sādhuṃ / stávai saháśradakṣiṇe //
- 12) AV VIII 8 23 samvatsaró ráthaḥ parivatsaró rathopasthó viráđiśágní rathamukhám / indraḥ savyaśśácandramāḥ sárathihí //
- 13) AV III 5 6-7 yé dhívāno rathakārāḥ karmārā yé manishiṇaḥ / upastínparṇa máhyaḥ tvám sárván kṛṇvabhíto jánān // yé rájāno rájakṛtaḥ sútá grāmaṇyáśca ye / upastínparṇa máhyaḥ tvám sárvánkṛṇv abhíto jánān //
- 14) Sd 0413-M. Ventris and J. Chadwick: Documents in Mycenaean Greek, Cambridge 1959, Nr. 268 (p. 366f.) (1) [i-qi]-ja pa-i-to a-ra-ro-mo-te-me-na do-we-jo i-qi-e-qi po-ni-ki-[ja] (2) [a-ra-ru]-ja a-ni-ja-pi wi-ri-ni-jo o-po-qi ke-ra-ja-pi o-pi-i-ja-pi. cf. L. R. Palmer: The Interpretation of Mycenaean Greek Texts, Oxford 1963, Nr. 213 (p. 317); Plath (1971) 17-31.
- 15) Od. 6 69-73 ἔρχεν ἄτάρ τοι δμῶες ἐφοπλίσσουσιν ἀπῆλην // ὑψηλὴν εὐκυκλον, ὑπερτερῆν ἄραρυϊάν. / ὡς εἰπὼν δμῶεσσιν ἐκέκλετο, τοὶ δ' ἐπίθοντο. / οἱ μὲν ἀρ' ἐκτὸς ἄμαξαν εὐτροχον ἡμιονεῖην / ὄπλεον, ἡμιόνους θ' ὕπαγον ζεῦξάν θ' ὑπ' ἀπῆλην.
- 16) Il. 24 265-274 ὡς ἔφαθ', οἱ δ' ἄρα πατρός ὑποδείσαντες ὀμοκλήην / ἐκ μὲν ἄμαξαν ἄειραν εὐτροχον ἡμιονεῖην / καλήην πρωτοπαγέα, πείριυθα δὲ δῆσαν ἐπ' αὐτῆς, / καὶ δ' ἀπὸ πασσαλόφι ζυγὸν ἦρεον ἡμιόνειον / πύξιον ὀμφαλόεν. εὐ οἰήκεσσιν ἀρηρός' / ἐκ δ' ἔφερον ζυγόδεσμον ἄρα ζυγῶ ἐνεάπηχην. / καὶ τὸ μὲν εὐ κατέθηκαν ἐνξέστῳ ἐπὶ ῥυμῶ, / πέξῃ ἐπι πρώτῃ, ἐπὶ δὲ κρίκον ἔστορι βάλλον, / τρεῖς δ' ἐκάτερθεν ἔδησαν ἐπ' ὀμφαλόν, αὐτὰρ ἔπειτα / ἐξείης κατέδησαν, ὑπὸ γλωχίνα δ' ἔκαμψαν.
- 17) Il. 23 128-132 αὐτὰρ Ἀχιλλεύς / αὐτίκα Μυρμιδόνεσσι φιλοπολέμοισι κέλευσε / χαλκὸν ζώνυσθαι, ζεῦξαι δ' ὑπ' ὄχεσφι ἐκαστον / ἵππους· οἱ δ' ὄρνυντο καὶ ἐν τεύχεσσι ἐδδονο, / ἄν δ' ἔβαν ἐν δίφροισι παραιβάται ἠνίοχοί τε.
- 18) Il. 4 297-309 ἱππῆας μὲν πρώτα σὺν ἵπποισιν καὶ ὄχεσφι / περούς δ' ἐξόπιθε στήσεν πολέας τε καὶ ἐσθλοῦς, / ἔρκος ἔμεν πολέμοιο· κακοῦς δ' ἐς μέσσοι ἐλασεν, / ὄφρα καὶ οὐκ ἐθέλων τις ἀναλκαῆ πολεμίζοι, / ἱππεύσιν μὲν πρώτ' ἐπετέλλετο· τοὺς γὰρ ἀνώγει / σφοῦς ἵππους ἐχέμεν μηδὲ κλονέεσθαι ὀμίλῳ· "μηδὲ τις ἱπποσύνην τε καὶ ἠνορέηφι πεποιθῶς / οἶος πρόσθ' ἄλλων μεμάτω Τρώεσσι μάχεσθαι, / μηδ' ἀναχωρεῖτω· ἀλαπαδνότεροι γὰρ ἔσεσθε. / ὅς δέ κ' ἀνὴρ ἀπὸ ὧν ὀχέων ἔτερ' ἄρμαθ' ἵκηται, / ἔγχι ὀρεξάσθω, ἐπεὶ ἦ πολὺ φέρτερον οὕτω. / ὧδε καὶ οἱ πρότεροι πολέας καὶ τείχε' ἐπορθεον, / τὸνδε νόον καὶ θυμὸν ἐνὶ στήθεσσι ἐχοντες."

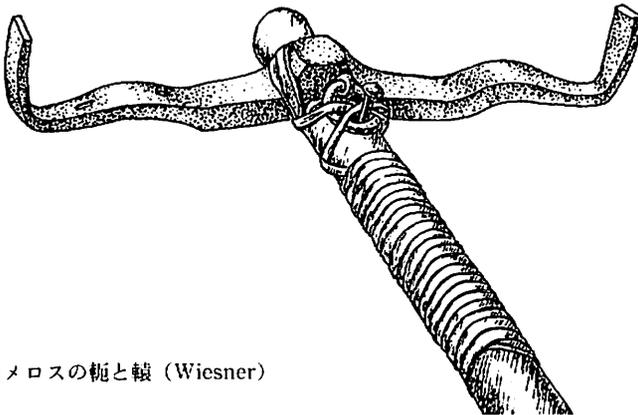
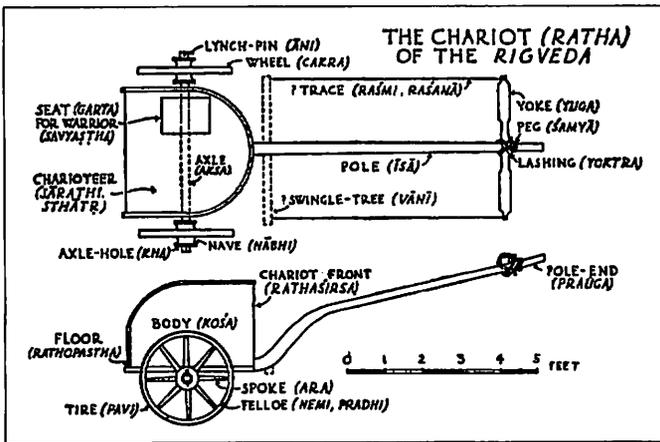
- 19) Il. 11 197-198 *ἔϋρ' υἷὸ Πριάμοιο δαίφρονος, Ἔκτορα δῖον, / ἑσταότ' ἔν θ' ἵπποισι καὶ ἄρμασι κολλητοῖσιν.*
- 20) Hethitische Gesetze (J. Friedrich, Leiden 1971) II 20 *ták-ku MAR. GÍD. DA / ku-iš-ki ta-a-iš-ta-i ta A.ŠÀ-iš-ši tan-na-i / ta ta-a-i-e-iz-zi ku-iš-ki 3 GÍN KÙ. BABBAR / pa-a-i. (-部表記を簡略化した)*
- 21) Die militärischen Eide der Hethiter (N. Oettinger, Wiesbaden 1976) Rs, III 36-45 *nu-uš-ma-aš IM. ŠU. NÍG. NIGÍN. NA pí-ra-an kat-ta da-it-ti/APIN-ja MAR. GÍD. DA GIGIR hi-im-ma-aš pí-ra-an / kat-ta da-ít-ti na-at ar-ha du-ya-ar-na-an-zi / nu kiš-an te-iz-zi ku-iš-ya-kán ki-e / li-in-ga-uš šar-ri-iz-zi nu-uš-ši IŠKUR-aš / APIN ar-ha du-ya-ar-na-a-ú / na-aš-ta IŠ-TU IM. ŠU. NÍG. NIGÍN. NA GIM-an-ma ú-el-hu / ša-ra-a Ú. UL ú-iz-zi na-aš-ta a-pí-el-la / IŠ-TU A. ŠÀ. ŠU ZÍZ-tar ŠE. ša-ra-a li-e / ú-iz-zi na-aš-ta UGU za-ah-hé-li i-ja-ta-ru.*
- 22) Marcus Cate, De agri cultura 62 *quot juga boverum, mulorum, asinorum habetis, totidem plostra esse oportet.*
- 23) Gaius Suetonius Tranquillus, De vita caesarum, Vespasianus 22 *Mestrium Florum consularem, admonitus ab eo "plostra" potius quam "plostra" dicenda, postero die "Flaurum" salutavit.*
- 24) Gaius Julius Caesar: Commentariorum de bello Gallico 4, 33 *primo per omnis partis perequitant et tela coiciunt atque ipso terrore equorum et strepitu rotarum ordines plerumque perturbant et, cum se inter equitum turmas insinuaverunt, ex essedis disiliunt et pedibus proeliantur. Aurigae interim paulatim ex proelio excedunt atque ita currus collocant ut, si illi a multitudine hostium premantur, expeditum ad suos receptum habeant. Ita mobilitatem equitum, stabilitatem peditum in proeliis praestant, ac tantum usu cotidiano et exercitatione efficiunt uti in declivi ac praecipiti loco incitatos equos sustinere et brevi moderari ac flectere et per temonem percurrere et in iugo insistere et se inde in currus citissime recipere consuerint.*
- 25) Quintus Horatius Flaccus, Carmina 3 24 9-16 *campestres melius Scythae, / quorum plostra vagas rite trahunt domos, / vivunt et rigidi Getae, / immetata quibus iugera liberas / fruges et cererem ferunt / nec cultura placet longius annua / defunctumque laboribus / aequali recreat sorte vicarius.*
- 26) Aischylos, Προμηθεὺς δεσμώτης 709-712 *Σκύθας δ' ἀφίξη νομάδας, οἱ πλεκτὰς στέγας / πεδάροινοι ναίουσ' ἐπ' εὐκύκλοις ὄχοις, / ἐκηβόλοις τόξοισιν ἐξηγοημένοι. /*
- 27) Flavius Arrianus *Ἰνδική 7 2-3 πάλαι μὲν δὴ νομάδας εἶναι Ἰνδοῦς, καθάπερ Σκυθῶν τοὺς οὐκ ἀροτήρας, οἱ ἐπὶ τῆσιν ἀμάξῃσι πλανώμενοι ἄλλοτε ἄλλην τῆς Σκυθίης ἀμείβουσιν, οὔτε πόλῃας οἰκέοντες οὔτε ἱερὰ θεῶν σέβοντες.*
- 28) *Viṣṇupurāṇa 5 10 33 na dvārabandhāvaraṇā na gṛhākṣetrinas tathā / sukhinas tv akhile loke yathā vai cakracāriṇah //*

- 29) AV 9 3 24 má naḥ páśam̐ práti muca gururbhāró laghúrbhava / vadhúmiva tvā śāle yatrakāmaḥ bharāmasi //
- 30) RV 1 164 2 saptá yuñjanti rátham ékacakram éko áśvo vahati saptánāmā/ trinábhi cakrám ajāram anarvám yátremá víśvā bhúvanádhi tasthúḥ //
- 31) Indische Sprüche (Böthlingk) 7083 sukhasyānantaram duḥkham duḥkhasyānantaram sukham / cakravat parivartante duḥkhāni ca sukhāni ca // 7085 sukhasyānantaram duḥkham duḥkhasyānantaram sukham / paryāyeṇāpasarpante naram̐ nemim arā iva //
- 32) RV 2 39 4 navéva naḥ párayataḥ yugéva nábhyeva na upadhíva pradhíva / śváneva no áriṣaṇyá tanúnām̐ khíḡgaleva víśrásaḥ pátam̐ asmán //
- 33) AV 10 8 34 yátra devásca manuṣyáścārā nábhāviva śrítáḥ / apám̐ tvā púṣpaḥ pṛcchāmi yátra tánmāyáyā hitám //
- 34) AV 3 30 5-6 jyáyasvantaś cittino má ví yaṣṭa samrādháyaṇtaḥ sádhurás cārantaḥ / anyó anyásmai valgú vādanta éta sadhricínān vaḥ sām̐manasaskṛṇāmi // samānī prapá sahá vo 'nnabhāgāḥ samāne yóktre sáhá vo yunajmi / samyāñco 'gnīm̐ saparyatārā nábhim̐ ivābhítaḥ //
- 35) Hphthitirche Gesetze I 79 tak-ku GUD A.ŠĀ-ni pa-a-an-zi BE. EL A.ŠA ú-e-mi-ja-zi / UD I. KAM tu-u-ri-ja-zi ku-it-ma-na-aš-ta MUL ú-qa-an-zi / na-aš EGIR-pa iš-hi-iš-ši pí-en-na-i
- 36) RV 2 18 7 máma bráhmendra yāhy áchā víśvā hári dhurí dhiṣvā ráthasya / purutrá hí vihāvyo babhúthāsmín̐ chūra sāvane mādayasva //
- 37) Sutta-niyāta 79 viriyam̐ me dhuradhorayham̐, yogakkhemādhivāhanam̐ / gacchati anivattantam̐, yattha gantvā na socati.

Der Wagen im Indogermanischen

Kiyozo Kazama

Der Wagen und seine Teile haben viele Namen in den indogermanischen Sprachen. Hier wählt der Verfasser wichtige Wörter des Wagens und erörtert ihre Etymologie mit Belegen.



ホメロスの輜と轅 (Wiesner)

Die Archäologen haben oft behauptet, dass die Indogermanen sehr früh in ihrem Heimatland den Wagen mit hölzernen Rädern nutzbar machten. Dabei muss man sagen, dass keine sichere Entsprechung den Wagen selbst bestätigt hat. Es gibt verschiedene Wörter für den Wagen, z. B. skr. *rátha*-, Gr. *ἄρμα* und Lat. *currus*. Die mannigfaltigen Formen drückten ursprünglich nicht den Wagen selbst, sondern seine Teile aus. Wenn man die Entsprechung von skr. *rátha*- untersucht, lässt sie sofort wissen, dass 'der Wagen' nur auf die indo-iranische Sprache beschränkt ist und die anderen Formen alle 'Rad' bedeuten. Unter dieser Tatsache liegt es nahe, dass der Wagen zur spätesten Stufe der Ursprache gehört.

Der Aufsatz ist eine der kultur-historischen Sprachforschung, die der Verfasser fortgesetzt habe.